

月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.140

ワイスマンに立ち向かうエステル
その信念に揺らぎは無し
英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～

ナユタもアルウェンも……？ ヴァンダライズ！
も～っと集まれ！ファルコム学園

メインストーリーがクライマックスに向けて
ますますヒートアップ！
『英雄伝説 暁の軌跡』

ファルコムニュース

英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を

ついに発売！ もう満喫してる!?

『英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ －CRIMSON SiN－』



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

フィールド&コマンドバトルがさらなる進化を遂げる!
『クロスチャージ』&『EXチェイン』





『黎の軌跡Ⅱ』は前作から採用の、シームレスで切り替えが可能なバトルシステム「フィールドバトル」&「コマンドバトル」に、それぞれ新機能となる「クロスチャージ」&「EXチャージ」が新搭載！　これにより、さらに爽快感溢れるバトルを繰り広げることが可能になっているのだ！

クロスチャージ

フィールドバトル専用。敵の攻撃をジャスト回避すると、回避行動後に発動アイコンが出現。その間に△ボタンを押すことでパーティメンバーに操作が切り替わると同時にチャージアタックで対象の敵を攻撃！　さらに、切り替わったメンバーは一定時間攻撃力が強化！





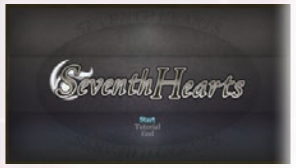

EXチェイン

コマンドバトル専用。コマンドバトル中に、以下の条件を満たして通常攻撃もしくはクラフトで攻撃すると自動発動する強力システム。メンバー同士の得意技で一斉攻撃を仕掛け、 周囲の敵も巻き込んで大ダメージを与えることができるのだ。

発動条件

- ●敵がスタン状態になっている
- ●操作中のメンバーがシャードブースト状態になっている
- ●パーティメンバーとS.C.L.M.(スクラム)を組んでいる

息抜きのつもりがいつの間にか大ハマリ!?
カードゲーム『セブンスハーツ』&『FIOのバルーン集め』

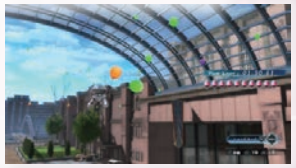





毎回「むしろこっちがメイン!?」と言いたくなるほど充実しているミニゲーム。今回は、これまで紹介してきた「メア」の導力ネットハッキングや、「スウィン」のターゲット尾行以外にも、ミニゲームやミッションが充実。冒険や探索の息抜きのつもりがまさかの大ハマリにご注意！

セブンスハーツ

様々な効果を持つ「アーツカード」を使用して相手とライフのやり取りを行い、勝敗を決していく４人対戦型のカードゲーム。毎ターン配布される４種類の攻撃カード、４種類の特殊カード、そして３水類の高位属性カードの計 11 種類のカードを駆使して、１位を目指そう！

FIOのバルーン集め

首都オーディスのトリオンモールで発生するミッション。浮遊型導力ドローン「FIO（フィオ）」を操作して、モール中に散らばってしまったバルーンを制限時間内に回収しよう！



タイトル：英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ -CRIMSON SiN-
好評発売中
ジャンル：ストーリーRPG
対応機種：PlayStation5 / PlayStation4
プレイ人数：1人
販売価格：【通常版】7,800円（税抜）
【Limited Edition】10,000円（税抜）
【Limited Edition】※シナリオブック付き 12,800円（税抜）
【DL通常版】7,500円（税抜）
【デジタルデラックス版】10,000円（税抜）
【シーズンパス】3,500円（税抜）
CEROレーティング：C

©2022 Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.

改めて『黎の軌跡Ⅱ』のシステムをご紹介♪ そして美麗なオープニングカットを堪能せよ！

ついに発売を迎えた、カルバード共和国を舞台とした『軌跡』シリーズ『黎の軌跡』の第２作『黎の軌跡Ⅱ』。今回は、改めて今作の魅力を紹介していくほか、美麗なオープニング映像の場面カットが到着した！

キャラの掘り下げや意外な一面が見られる
『コネクトイベント』その一部をご紹介！

「フェリの特訓」

兄カシムと再会してから妙に思い詰めているようなフェリ。声をかけようとフェリのもとへ出かけて行ったヴァンだが、そこにはアーロンの姿もあって……？

フェリ ＆ アーロン



「人気女優からの誘い」

高級ホテルの従業員に頼んで何やら大掛かりな機材を運び込んでいるトップ女優のジュディスとニナ。酒やツマミまで買い込んでいることを嗅ぎつけたヴァンだったが、意外にも二人のとある計画に巻き込まれてしまうことに。



ジュディス ＆ ニナ



セリス ＆ リオン

「月下の湖にて」

師父ベルガルドに師事を受けた者同士であり、姉弟弟子ともいえる二人の守護騎士、セリスとリオンが湖のほとりへ出かけることに。武器まで持ち出していったため、様子を見に行ったヴァンだが……。



『黎の軌跡II』
オープニングギャラリー





★涼しくなってきたし、悪夢でも纏ってみようかな★



新たなる悪夢



アニエスが見たかったもの



目が行くところ



真祖の観察眼



話を通す魔物



お察しするAI



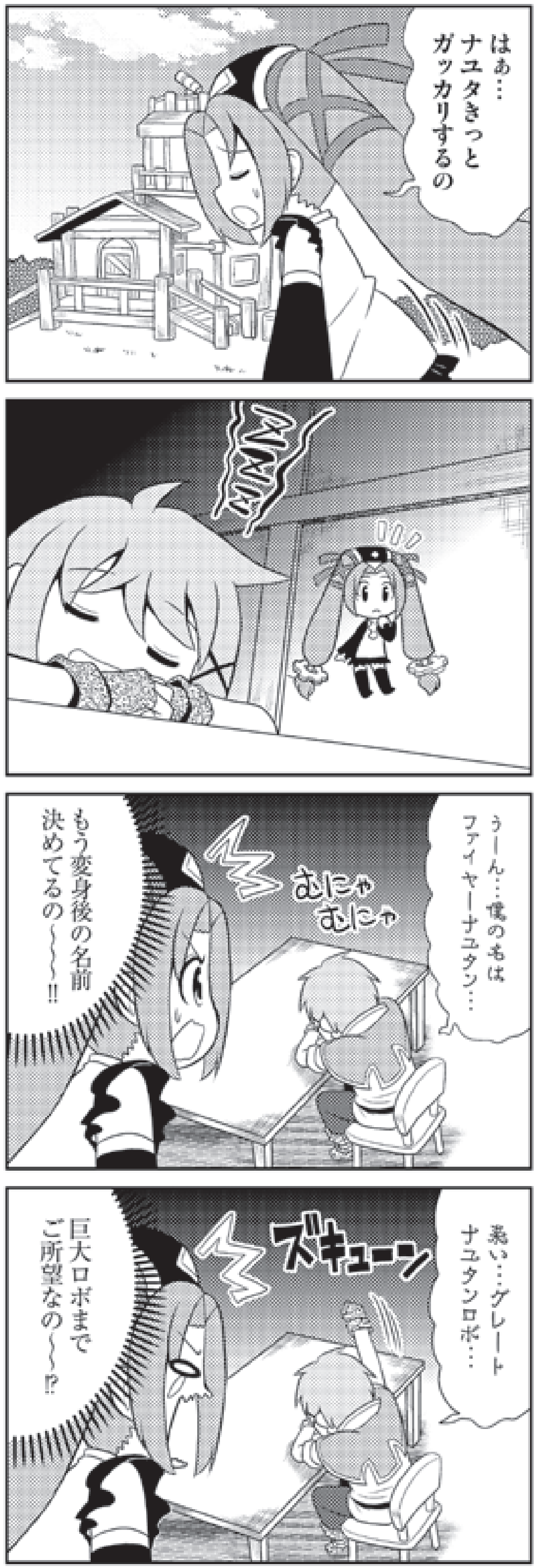
シャードとは



チートなカ



夢いっぱいの少年



ルゥの特技



空気を読める少年



バックグラウンドから



纏いたい兄



纏わない弟

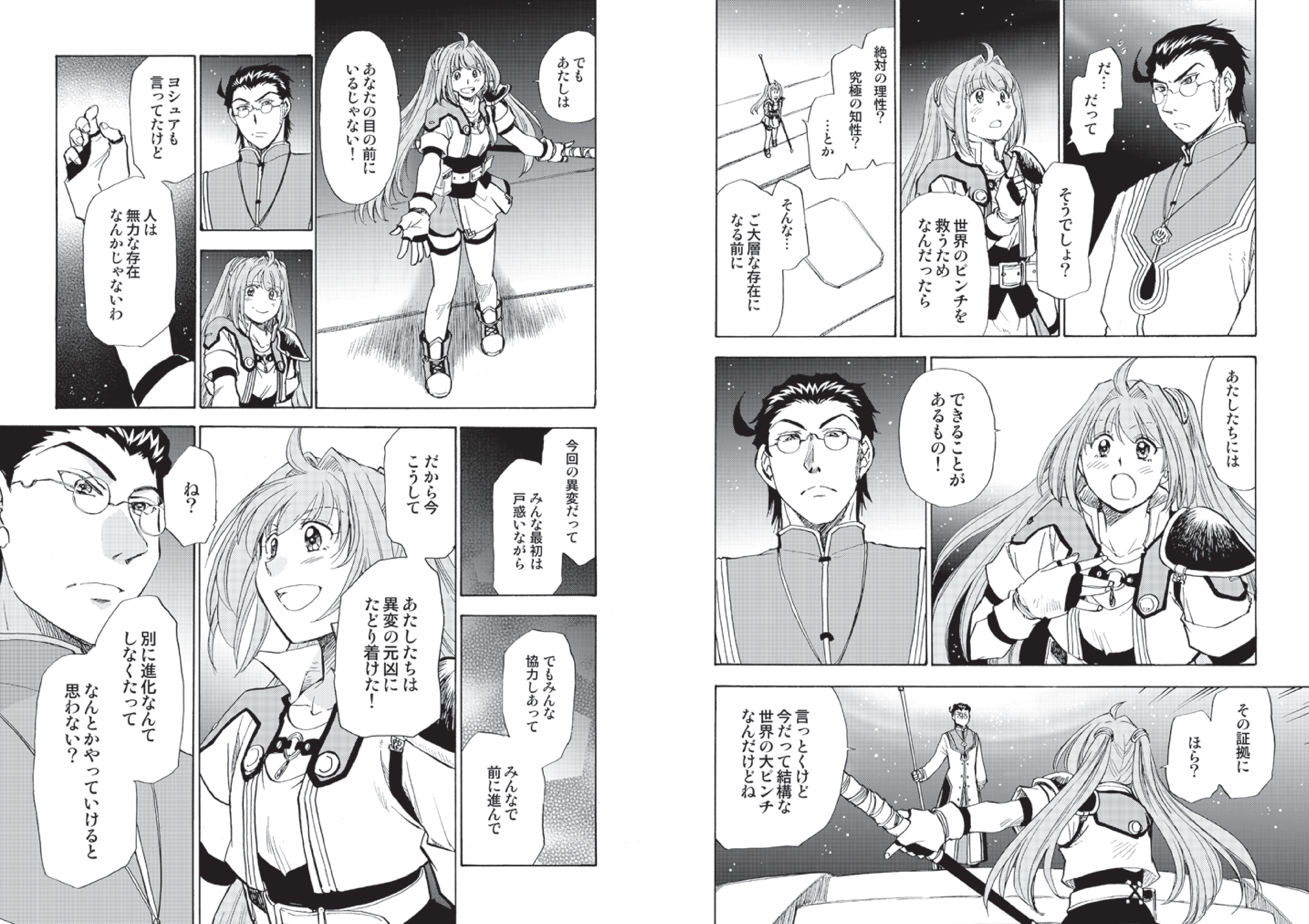




空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
破滅を防ぐために 人を進化させる？
《輝く環(オーリオール)》の力で？
それが あなたの やってきた
《福音計画》…
……
正直
余計なお世話なんですけど



穏やかで騒がしい生活が戻ってきたファルコム学園。
徐々に英雄、戦士、さらには曲者までが還ってくるなか、
新たに「イースIX」のキャラクターも参戦！
まだまだ止まらない異能・新久保だいすけの筆が冴え渡る！
おまたせ！ 待望の第2巻だよ！
も〜っと集まれ！
ファルコム学園②
新久保だいすけ
定価：本体 900 円＋税
ISBN 978-4-8021-3213-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©DAISUKE ARAKUBO ©2020 FIELD-Y
発行：フィールドワイ フィールドワイ公式HPはこちら www.field-y.co.jp
発売：メディアパル ファルコムブックス公式HPはこちら www.field-y.co.jp/falcombooks


だ…
だって
そうでしょ？
世界のピンチを救うため なんだったら
絶対の理性？ 究極の知性？ …とか
そんな… ご大層な存在になる前に
あたしたちには
できることが あるもの！
その証拠に
ほら？
言っとくけど 今だって結構な 世界の大ピンチ なんだけどね
でも あたしは
あなたの目の前に いるじゃない！
ヨシュアも 言ってたけど
人は 無力な存在 なんかじゃないわ
今回の異変だって
みんな最初は 戸惑いながら
でもみんな 協力しあって
みんなで 前に進んで
だから今 こうして
あたしたちは 異変の元凶に たどり着けた！
ね？
別に進化なんて しなくたって
なんとかやっていけると 思わない？

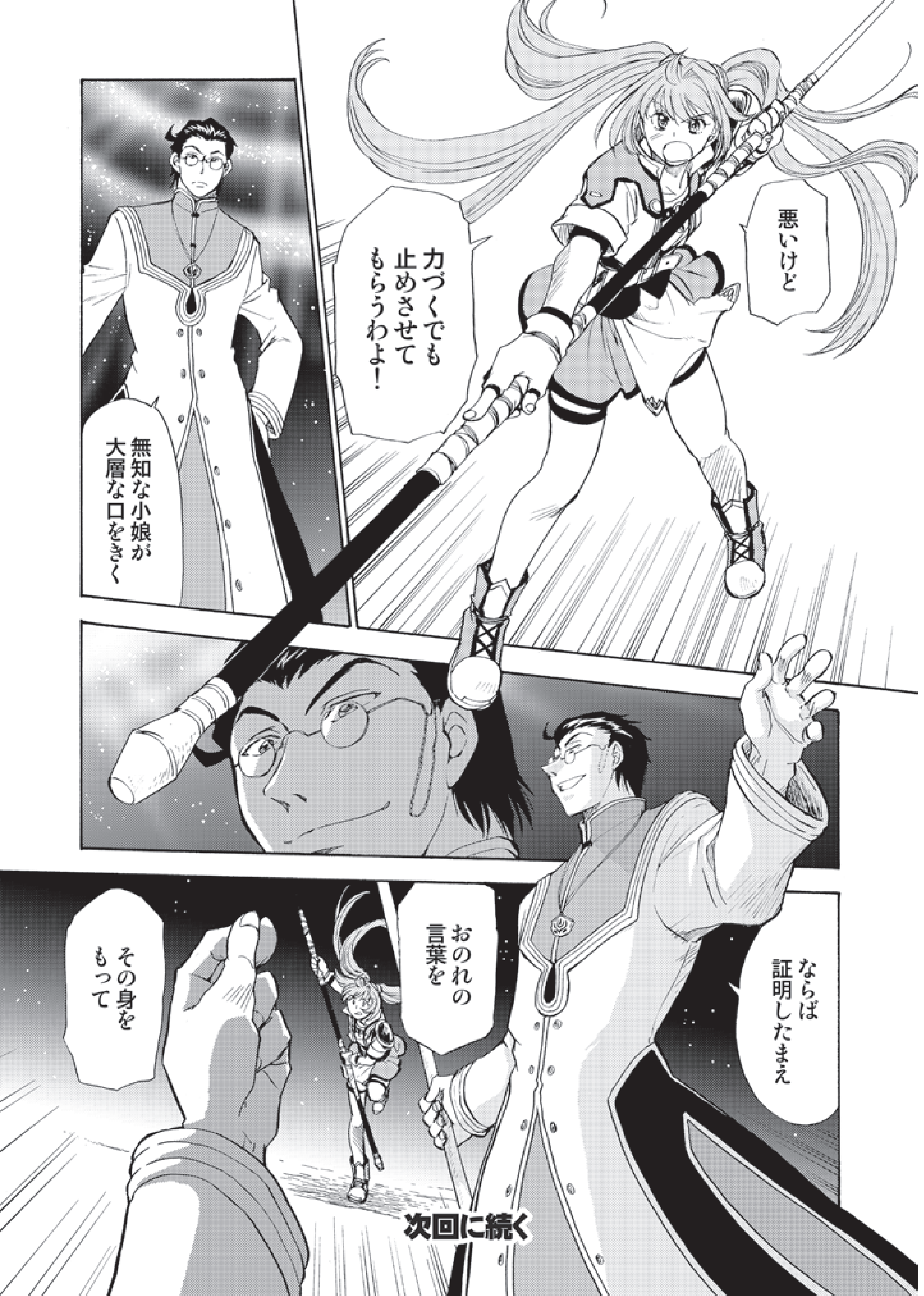

…群れて生き延びるのは獣や虫ですらやっていることだ
その程度の行動をもって人の可能性を語るつもりかね
そりゃそうでしょ
あたしたちだって同じ生き物なんだし
それが生きているものの強さなんじゃないのかな
《輝く環》でいろんなものを傷つけてまで万能超人になる必要なんかない
みんながちょっとした思いやりで
お互いに助け合うだけで
世界はちゃんと守っていけるのよ


何かと思えば助け合いか…
お互いを助け合える人の歴史が
血に塗れているのはどうしてなのかね？
色々なものを傷つけるだけの戦争が
人の手で幾度となく繰り返されてきたという事実こそ
人の絆など無力な存在でしかないことを証明しているのではないか
そんなことない！


戦争が起きたけど
お母さんは戦火の中命がけであたしを守ってくれた！
それがきっかけであたしは
人を守り支える遊撃士の道を志して
ひとりじゃ絶対にたどり着けなかったこの場所に
今あたしは立っている
異変を止めて戦火を未然に防ぐために！
志を同じくする人たちと一緒に！
それでも人は無力だって言えるの!?
ああ言えばこう言う…


…ねぇ
ほんとにそう思ってるの？
本気で人は無力だから進化させなきゃいけないって
ほんとに…本気でそう信じてる？
ようやく君も理解できたかね


……でも
あたしは遊撃士だから
あなたのしてきたこととこれからやろうとしてることを
見過ごすわけにはいかないの


悪いけど
力づくでも止めさせてもらうわよ！
無知な小娘が大層な口をきく
ならば証明したまえ
おのれの言葉を
その身をもって
次回に続く


英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価：本体991円+税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
好評発売中!!
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐！
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる！
激動のクライマックス！
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp/falcombooks


リベール王国次期女王たるわたくしの名に賭けて！
リベール王国に姿を現した、
結社《身喰らう蛇》の牙・執行者たち。
その動きと示し合わせたかのような
エレボニア帝国の不穏な行動に王国は揺れる。
そして物語は、古代ゼムリア文明の精華・
リベル＝アークへと飛翔する！
英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～⑥
啄木鳥しんき
定価：1000円（本体909円+税）　ISBN 978-4-8021-3294-7
発行：フィールドワイ　発売：メディアパル
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©Kitsutsuki Shinki
©FIELD-Y
◉フィールドワイ公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp
◉ファルコムブックス公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp/falcombooks

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

『The Legend of Heroes閃の軌跡 Northern War』の第一弾PV・ビジュアル解禁！　今すぐチェック!!

「英雄伝説閃の軌跡」を原作とする2023年放送のTVアニメ『The Legend of Heroes閃の軌跡 Northern War』の第一弾PV、第一弾ビジュアルとメインキャストが公開されました。

世界に多くのファンを抱える人気ストーリーRPG「英雄伝説閃の軌跡」シリーズ初のアニメ化プロジェクトとして注目を集めており、アニメーション制作はタツノコプロが担当します。

舞台は七耀暦1205年、ゼムリア大陸北西部に位置するノーザンブリア自治州。この土地で生まれ育ち、“北の猟兵”としてノーザンブリアを守るために戦うヒロイン・ラヴィの視点で軌跡シリーズの物語が描かれる、オリジナルストーリー。

解禁された第一弾PVでは、雪山で巨大なグルノージャと果敢に戦うラヴィ(CV.小市眞琴)の軽快な身のこなしが印象的です。
仲間となるマーティ(CV.中村悠一)、イセリア(CV.ブリドカットセーラ恵美)、タリオン(CV.小野友樹)らのアクションシーンも映され、共にエレボニア帝国への内偵任務を指示された4人に待ち受ける冒険の数々を期待させる内容となっています。





第一弾ビジュアルには、ノーザンブリア自治州から帝国を目指す4人の姿が描かれ、ラヴィの任務にかける強い意志を読み取ることができるほか、マーティ、イセリア、タリオンの三者三様の表情からも、それぞれの個性を感じることができるビジュアルとなっています。

公式サイト
https://sen-anime.jp/

カーテン魂「軌跡シリーズ」最新グッズ販売開始

カーテン魂より、『英雄伝説 閃の軌跡』『英雄伝説 創の軌跡』のラバーマットと、カードスリーブが新登場！

新作グッズ

ラバーマット（全3種）



カーテン魂　商品ページ
https://www.curtain-damashii.com/item/tag/falcom/

カードスリーブ（全4種）



※カードスリーブは、2022年10月31日（月）までの期間限定受注商品となりますのでご注意ください

クイズとアンケートに答えて景品をGET！WEB抽選会開催!!

PS5／PS4「英雄伝説 黎の軌跡II-CRIMSON SiN-」序章をプレイして、アンケートフォームからクイズに答えるWEB抽選会が開催中。正解者の中から総計440名様に豪華賞品をプレゼント！



【問題】
首都イーディス・セントルマルシェを縄張りにしているボス猫の名前は？



応募方法

期間中に、ゲームアンケート「英雄伝説 黎の軌跡II」にご回答ください！黎の軌跡IIアンケート内に、WEB抽選会用の専用設問（クイズ、希望の景品）が加わっています。

アンケートフォーム
https://www.falcom.co.jp/kuro2/special/raffle-web.html

応募期間
2022年9月29日(木)10:00～10月31日(月)23:59

※ご応募はおひとり様1回まで。重複した応募は無効と致します。
※プレゼント当選者には、11月2日(水)頃直接メールをお送りします。
※当選メールが受信できるよう「@falcom.co.jp」からのメールの受信設定をお願い致します。
※景品交換は承れませんので予めご了承ください。
※ゲームアンケートの通常のマンスリープレゼントは、WEB抽選会当選者様以外からの抽選とさせていただきます。

【A賞】
出演キャストサイン色紙 ……………………計20名

《キャスト一覧》
- カトル（田村睦心）×1
- キンケイド（福山潤）×1
- レン（悠木碧）×1
- シズナ（内田真礼）×1
- スウィン（梶原岳人）×1
- ナーディア（石見舞菜香）×1
- リオン（斉藤壮馬）×1
- セリス（ファイルーズあい）×1
- ジン（稲田徹）×2
- ボーレット（原由実）×1
- ニナ（上田麗奈）×1
- アルテラ（？？？）×1
- グラムハート（小山力也）×1
- マリエル（本渡楓）×1
- ツクレツィア（植田佳奈）×1
- サァラ（瀬戸麻沙美）×1
- シャヒーナ（山本希望）×1
- ミラベル（桜木つぐみ）×1
- イクス（堀江瞬）×1

【B賞】
ちびキャラクリアボトル ……………………計20名

【C賞】
2WAYアクリルキーホルダー ………………各50名

計400名

フィギュア「リーシャ・マオ」1／8スケール予約受付中！

コトブキヤ×日本ファルコムが送る『軌跡シリーズ』フィギュア化計画第3弾「リーシャ・マオ」の1／8スケールフィギュアを予約受付中です。巨大な斬魔刀を難なく扱うゲーム内の印象をそのままに、得物を片手で持ちあげた勇ましい姿で立体化。煌びやかな東方風の衣装に身を包み、美しさと力強さを兼ね備えた逸品に仕上がっています。台座には彼女が戦闘時に駆使する鎖や蝶をプリントし、フィギュア全体を華やかに彩ります。多くのものに出会いながら戦い続ける強く心優しい凶手をぜひお手元でお楽しみください。



★コトブキヤショップ限定特典
『微笑み顔パーツ』
※ご予約いただいた方には、必ず特典をお付けいたします。
※特典付アイコンや限定特典の表記が商品ページから無くなりますと、配布終了となりますのでご注意ください。
※コトブキヤショップ購入特典は、商品の再生産時や海外販売及び、イベントや臨時出店等の企画により直営ショップ以外で付属、配布させていただく場合がございます。



発売月：2023年3月
価格：20,350円(税込)
仕様：塗装済み完成品
スケール：1／8
サイズ：全高約205mm(台座含む)
原型・設計：中邨拓智

© Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.

新／衣装替えキャラクターをチェック！
9月の

THE LEGEND OF HEROES

暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
祝！ ９月もメインストーリー終章の新弾が更新！ クライマックスまで試験班は止まらない!?
さらに、デュバリィが騎士の甲冑を脱ぎ意外な衣装替えを披露！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj



氷の女王・デュバリィ

デュバリィがハロウィンに先駆け（？）、女王姿を披露。白を貴重とした麗しい姿が印象的だ。忠誠心の高い騎士であるデュバリィだけに、そのギャップに惹きつけられる。

メインストーリー 終章第６弾「より良き未来のために」実装！

巨大振動装置を破壊するため、試験班は少年たちの始まりの地、モンレインへと向かう。
“全て”に終止符を打つべく、絆を確かめ合うナハトたち。
レミフェリアの民の想い、そして未来を背負い、今、試験班最後の戦いが始まる。









※画像は開発中のものです。 ※ 上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

© Nihon Falcom Corporation. All rights reserved. © USERJOY JAPAN Co., Ltd. All Rights Reserved. © USERJOY Technology Co., Ltd. All Rights Reserved.



◉フィールドワイ公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp
◉ファルコムブックス公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp/falcombooks



発行:フィールドワイ
発売:メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks

ロイドたち四人はウルスラ病院から戻ってきて、鉱山町マインツに向かう途中だった。
中央広場で声をかけられる。
「あ、ロイドさん！」
呼ばれたほうを見ると、黒に近い紫色の髪の少女と、まるで少年みたいな格好をした女の子が、こちらに歩いてきていた。

英雄伝説 零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～

特務支援課メンバーが過ごす
クロスベル自治州のゆる～い(?)日常！



第6回

©YUKIYA MURASAKI, KUBOCHA

エレボニア帝国とカルバード共和国という大国に挟まれながらも、自治州として独立していたクロスベルを舞台とした『零の軌跡』、『碧の軌跡』シリーズ。続編となる『閃の軌跡』、『創の軌跡』においても激動の中にあり、様々な壁が立ち塞がっていたが、怯むことなく立ち向かっていったのがロイド・バニングス率いる特務支援課メンバーだ。そんな特務支援課メンバーが、もしかしたら過ごしていたかもしれない日常を描く、魅力たっぷりの一冊をご堪能あれ！

製品情報
好評発売中
著　　：むらさきゆきや
イラスト：窪茶
定　価：1,210円（税込）

「やあ、リーシャに、シュリじゃないか」
リーシャが丁寧におじぎして、シュリがぶっきらぼうに片手を挙げる。
「こんにちは、みなさん」
「ちわ」
エリィとティオが挨拶を返した。
「こんにちは」
「……どうもです」
ランディが驚愕に目を見開く。
「なんてこった！　今日はついてるぜ！　こんなところで、アルカンシェルのスター、リーシャちゃんと会えるなんて!!」
「そ、そんな、大げさですよ」
「リーシャ姉の場合、大げさでもないんじゃねえの？　最近、ファンレターもすごいしな」
シュリにまで言われ、リーシャが赤面する。
ロイドも彼女の演技に見惚れたひとりだから、ファンの気持ちはわかるが……これ以上、言ったら、本当に困らせてしまいそうだ。
「今日は、リーシャたち、練習が休みなのか？」
「はい。お休みになったものだから、困ってるんです」

「休みになったから、困る？」
ロイドは首をかしげた。
エリィたちも不思議そうな顔をする。
「どういうことかしら？」
「実は、お休みに慣れてないもので、なにをしたらいいのかわからなくて」
「な、なるほど……」
シュリが唇を尖らせる。
「あんたたち、支援課だろ？　オレたち市民なんだから助けてくれよ」
「う、うーん……休日の使い方か……」
「家で寝てるってのは、ナシだぞ。それ、オレが提案して、リーシャ姉にダメ出しされたからな」
「いくらなんでも、それは提案しないから安心してくれ」
ティオが手を挙げた。
「ん」
「おっ、いい案があるのか、ティオ？」
「ふふ……完璧です。休日といえば、ゲームです。とくに、対戦型の導力ネットゲームは、いくら時間があっても足りないほどです。〝ポムッと！〟といって、まだ開発段階のもの

なんですが——」
「すみません……それは面白そうですが……私、導力端末を持ってませんから……」
「オレ、難しいのはパスな。眠くなるから」
「がーん」
　ティオが膝をついた。
　今度は、エリィが前に出る。
「まだまだ導力端末は広まってないものね。だけど、本ならなにもなくても読めるわ。ここからだと、市立図書館も近くにあるし」
「ん～……すみません。できれば、シュリちゃんと楽しめるものがいいと思うんです」
「だから、難しいもんはパスだって！　本なんか表紙を見ただけで眠くなるだろ‼」
「そ、そうよね……」
　しゅん、とエリィがうなだれる。
　不敵な笑い声をあげたのは、ランディだった。
「この休日マスターの出番が来たようだな！　休日なら任せろ！　俺こそが、キング・オブ・休日‼」
「ランディ、お酒とギャンブルと非道徳的な場所は勧めないでちょうだいね？」
　エリィに釘を刺されると、キング・オブ・休日が、グッと言葉に詰まった。
　ティオが眉をしかめる。
「……ランディさん、最低です」
「そ、そ、そんなんじゃねえ！　え～～～っと、そうだ！　今から俺たちマインツに向かうんだけど、一緒に行くなんてのはどうだ？」
　シュリが手厳しく返す。
「はぁ⁉　なにしに行くんだよ？　マインツなんて、山しかないんだろ⁉」
　しかし、リーシャは興味を示したようだ。
「もしかして、シュリちゃんは、マインツに行ったことないの？」
「ノーザンブリア自治州から流れてきて、やっとクロスベルに着いたんだぜ？　わざわざ街から出ないって」
「大変だったときは、そうでしょうけど……今は、少しくらい遠出する余裕があるんじゃない？」
「まぁ、昔とは違うけどさ……」
「マインツは鉱山町で、特別な観光地ではないけど、行ったことがないなら、見ておいたほうがいいと思うわ」
「うーん、他に案はないのかよ⁉」
　シュリに訊かれて、ロイドは頭をかいた。

「いや、考えてみたら、実は俺も休日にはトレーニングとか、釣りくらいなんだよな」
「はぁ～、つまんねえヤツだな」
「うう……返す言葉もない」
「仕方ねえ、リーシャ姉がいいって言うなら、つきあうか」
「ふふ、ありがとう、シュリちゃん」
　リーシャが微笑んだ。
　ランディが小さく拳を握る。
「おし！　乾いた仕事に、潤いが！　可憐な花が！　道中が楽しくなりそうだぜ」
　エリィとティオがジト目になっていた。
「どういう意味かしら？」
「……聞き捨てなりませんね」
「え？　あ、いや……それはだな……」
　ランディがあれこれと言い訳する。
　ロイドはリーシャたちと顔を見合わせ、苦笑していた。

　マインツに向かうため、西通りを通って住宅街のほうへ向かう。
　途中、リーシャが尋ねてきた。
「誘っていただいたので一緒に来ちゃいましたけど、よかったんですか？　お仕事の最中だったんじゃ？」
「支援要請を受けてるけど、べつにマインツまで一緒に行くだけなら、大丈夫だよ」
「ふふ、よかった」
「リーシャこそ、本当にマインツでよかったのか？」
「はい……街だけにいると忘れそうになるものを、いろいろ思い出させてくれますから」
「なるほど。そういう感性がアーティストには大切なのかもしれない。さすがだな、リーシャは」
「そ、そんなことは……」
　また彼女が照れて困ったような笑みを浮かべる。
　シュリが割り込んできた。
「こらっ、リーシャ姉にベタベタすんなよ」
「いや、ベタベタしてるつもりはないんだけど……」
「シュリちゃんってば……実は、ロイドさんと仲良くしたかったの？」
「はあっ⁉　どうしてそうなるんだよ、リーシャ姉⁉」

「えっ、違うの？」
「オレが、こいつと仲良くしたいわけないだろ！」
シュリが睨みつけてくる。
「ははは……まいったな……」
最初に出会ったとき、いろいろあったせいで、ちょっと苦手に思われてしまっているようだ。
ロイドとしては不可抗力だと思っているのだが。
「そもそも、あんたら、マインツなんかに、なんの用事なんだよ？」
少し長くなるけど――と前置きして、ロイドは受けている支援要請について話すことにした。
「――鉱山町で働いてる人は大勢いるんだが、みんな忙しいせいか、健康診断を受けに来ないらしくてね」
「へー休みもなく働いてるのか……大変だな……」
「ああ……」
人によっては、酒盛りや夜遊びに忙しいこともあるようだが。
「そのため、定期的にウルスラ病院から医師が健康診断に行ってるらしいんだ。大勢が病院に来るより効率的だからね」

「そういや、オレはまだ受けてないけど、劇団（アルカンシェル）でも健康診断があるんだよな」
「入団したときに説明があったわね」
リーシャがうなずいた。
そりゃ、当然だな――とランディが言う。
「イリア・プラティエやリーシャちゃんが健康診断に来たら、ファンが集まっちまって大変なことになるぜ」
エリィが苦笑して、ティオが肩をすくめて嘆息した。
「そうね。想像できてしまうだけに、怖いものがあるわ」
「……健康診断どころではなくなるかと」
人気者になるのも大変だが、人気者というのも大変らしい。
シュリが興味なさそうにしつつも続きをうながす。
「んで、その健康診断がどうかしたのか？　あんたたちが、やるとか？」
「俺たちは警察官であって医者じゃないから無理だよ。実は、ウルスラ病院から出た医師と看護師が、まだマインツに到着してないらしくてね」
「どこかで寄り道でもしてんのか？」
「そうかもしれない。なにか理由があるんだと思う……意外と、すこし遅れただけで、もう到着しているかもしれないけどね。俺たちはウルスラ病院で頼まれたから、様子を見に

行くことにしたんだ」
　ランディが、ロイドの肩に手を置く。
「なんせ、同行した看護師ってのが、ロイドの姉のセシルさんだしな！」
　ティオが補足する。
「……そして、担当医はヨアヒム先生です。あれこれ理由をこじつけて、釣りをしているのかもしれません」
　今回の健康診断を担当する医師はヨアヒム・ギュンターといい、腕は確かなのだが、仕事を抜け出して釣りに興じるという悪癖があった。
　リーシャが不安そうな表情を浮かべた。
「連絡がつかない看護師って、セシルさんなんですか……」
「うん……そういや、リーシャはセシル姉と会ったことがあるんだな」
「はい。イリアさんの幼馴染みとして、創立記念祭の初日に、紹介してもらいました」
　シュリが思案顔をする。
「そういや、オレも挨拶くらいはしたな……優しそうな人だよな」
　警戒心の強いシュリが、初対面の相手を褒めるなんて珍しい。それだけ、セシルの人柄が温かいということか。
「ん？　な、なんだよ？　オレ、変なことは言ってねえぞ？」

「うん。セシル姉は優しい女性（ひと）だよ」
　ロイドはうれしくて笑顔をこぼしていた。
　マインツ山道に出たところで、バス停が見えてくる。
　リーシャは誰にも聞こえないほど小さな声で「なんだか、嫌な予感がする……」とつぶやいた。

「どうしたのかしら？　いつもより待ってる人が多いみたいだけれど……」
　エリィが首をかしげた。
　列の先頭にならんでいる青年が、こちらに気づいて声をあげる。
「おお！　あんたら、支援課だろ⁉　なんとかしてくれよ！」
　ロイドたちは駆け寄った。
「どうかしましたか⁉」
「時間を過ぎても、バスが来ないんだよ！　こっちは仕事があるってのに！」
　他のならんでいる人たちも口々に文句を言いだした。

落ち着いてください、すぐ調べます――とロイドは請け負う。
　あっ、とティオが指を差した。
「ヨアヒム先生です」
　最初は気づかなかったが、列の最後尾にならんでいる白衣の男は――医師のヨアヒムだった。
「いや～、君たち、こんなところで会うなんて奇遇だね」
「こんにちは！　こちらにいらしたんですか、ヨアヒム先生」
「ん？　その様子だと、僕に用事があるのかな？」
「はい。ウルスラ病院から〝マインツへの到着が遅れているようだから様子を見てきて欲しい〟と依頼されまして」
　ヨアヒムが苦笑する。
「いや～、まいったな……ちょっと、いいポイントを見つけちゃったものでね」
「やっぱり、釣りをしてたんですか……」
「こればかりは、やめられなくてね！　だけど、健康診断は研修医のリットン君に任せたから大丈夫のはずなんだけどね……行ってないのかい？」
「え？　先に向かったんですか？」
「いくら僕が釣り好きとはいえ、忙しい鉱夫たちを待たせるわけにはいかないからね。リットン君に〝いいかね、今から君に研修課題を出すよ――マインツで健康診断をして、その結果をレポートとして提出したまえ〟と……」
　ロイドたち全員が呆れていた。
　やれやれ、とヨアヒムが首を左右に振る。
「研修医ともなれば、それくらいやれなくてはね。まったく困ったものだよ」
「……困ったものなのは、ヨアヒム先生のほうかと」
　ぼそり、とティオがつぶやいた。
　ロイドは少し考えて――
「徒歩で行ってみるしかないな」
　と結論づけた。
　エリィが観念したように、うなずく。
「導力バスが故障したのかもしれないものね。乗客は外に出なければ安全だと思うけど、動けなくなっているかもしれないわ」
「……そうですね。今のわたしたちであれば、問題なくクロスベルかマインツへ護衛できるかと。街道には、さほど強い魔獣はいませんから」
　ティオの言うとおりだろう。
　ランディもうなずく。

「ふぃ～、しゃあねえな！　マインツまでだと、けっこうな距離になっちまうが、体力つけるには、ちょうどいいハイキングになるだろ！」
「はは……そうだな。警察学校でのサバイバル訓練を思い出すよ」
「俺も警備隊を思い出すぜ」
　意気投合するロイドとランディに対して、エリィとティオは歩きはじめる前から疲れたような顔をしていた。
　リーシャは、ずっと嫌な予感を抱えていた。
　徒歩で行くと決めたロイドが、こちらへと視線を向ける。
　彼は丁寧に頭を下げた。
「すまない、リーシャ、シュリ……トラブルが起きたようだ。バスは来ないし、今日はここで——」
「私も行きます！」
「えっ⁉」
　リーシャは真剣な口調で告げた。ロイドたちだけでなく、シュリまで驚いて目を丸くする。
「なんでだよ、リーシャ姉⁉　そんなにマインツに行きたいのか⁉」

「いえ、そういうわけじゃなくて……あの、その……直感というか……」
（ああ、どう説明したら……⁉）
　リーシャは苦悩する。
　ロイドがうなった。
「う～ん、街道なら徒歩でも危険は少ないと思う……でも、どうしてそんなに行きたいんだ？　マインツに用事があるわけじゃないんだろ？」
「それは……悪い予感というか……」
「え？」
　リーシャは頭をかかえる。『銀(イン)としての直感が、危険を察知しているのでな』と言えたら楽なのだが、そんなことは、寝言でも口走れない。
　しかし、放ってもおけない気持ちだった。
　意を決して——
「ううぅ……あ、あの！　私、ダイエット中だから、ちょうどいいかなと思いまして！　ハイキングとか、体力もつきそうですし！」
「ダ、ダイエット？」
　ぽかん、としてるロイドに対して——

　ハッ、とシュリが顔色を変えた。
「体力⁉　そういうことか、リーシャ姉！　おい、オレも行くぜ」
「シュリまで⁉」
「イリアさんに、〝早々にへばるんじゃないわよ？〟って言われたんだ。それって、オレに体力がないって意味だろ⁉」
「まぁ……そう取れなくもないと思うけど……」
　うん、とシュリがうなずく。
「なるほど、ハイキングか。これぞ、有意義な休日の使い方って感じだよな～。劇場の中じゃできないことだ」
「待ってくれ、シュリ……ここから、マインツまでは、かなりの距離がある。子どもの足では――」
「はぁ？　オレは毎日、アルカンシェルで特訓を受けてるんだぞ。そこのチビッコよりは歩ける自信があるぜ」
　いきなり天秤に掛けられたティオが、口をへの字に曲げる。
「……もしかして、チビッコというのは、わたしのことでしょうか？　非常に不本意なのですが」
「とにかく、あんたたちと一緒なら安全なんだろ？　なら、いいじゃんか」

　押し問答していると、バスを待っている人たちが、ざわつきはじめた。「イリアさん？」「アルカンシェル？」「あれって、リーシャ・マオじゃ？」「まさか。スターがマインツなんて行くわけないだろ」「でも……似てるよなあ～……？」
　エリィがロイドに耳打ちする。
「ちょっと、まずいわよ？　騒ぎになっちゃうわ」
　ティオもささやいた。
「ロイドさん……置いて行きましょう」
「まぁ、行きたいって言うなら、いいんじゃねえの？　このふたりなら〝途中で休憩〟なんて言い出さないだろうし……道中の安全は、このランディ・オルランドにすべて任せなさいって！」
　魔獣のマの字もないような場所だというのに、巨大なスタンハルバードをぶんぶんと振り回す。
　シュリが肩をすくめた。
「まぁ、ダメだって言うなら、リーシャ姉とふたりで勝手に行くけどな」
　街道を徒歩で行くことが禁止されているわけではない。
　ロイドが降参した。
「はぁ～、仕方ない……ただし、安全第一だ。俺たちの言うことは聞いてもらうからな」

「いいけど、変なこと命令するなよ？」
「するわけないだろ⁉」
ぺこり、とリーシャは頭をさげる。
「すみません、ロイドさん。わがままを言ってしまって……シュリちゃんのことは、私が面倒を見ますから」
「うん。俺たちも気をつけるけど、よろしく頼むよ」
「はい……」
リーシャは、シュリと一緒でなければ、ひとまずロイドたちと分かれ、《銀（イン）》の姿になってから追いかけることもできたのだが。
（ううん……シュリちゃんのことは、イリアさんに頼まれたんだから）
ぐっと気を引き締める。
（なにが待ってるかはわからないけれど、私が、シュリちゃんもロイドさんたちも守らないと‼）
「おお、リーシャ姉が真剣だ……やっぱりハイキングって、効果的な練習なんだな」
いろいろとシュリに誤解されている気がした。

できるだけ急いだほうがいいのは間違いないが、到着したときにバテバテでは意味がない。
ロイドは、魔獣との接触を避けつつ、みんなの調子を気にしながら進んでいった。
最初はシュリのことを一番心配していたが、すぐに大丈夫だとわかった。
アルカンシェルのふたりは充分に健脚らしい。
むしろ、大きな魔導杖（オーバルスタッフ）を持っているティオのほうが、大変そうだった。
「すこし休憩しようか？」
「……問題、ありません……はぁ、ふぅ……このくらい、へっちゃらです」
「うーん、そうか。無理はしないでくれよ、ティオ」
「もちろんです、ロイドさん……はふっ……」
山の中を進んでいた一行だが、ぐるりと左へ曲がったところで、視界が開けた。
マインツの山々を眺めることができる場所だ。
「すごい……」
シュリが立ち止まり、その景色に目を奪われていた。
その横にリーシャもならんで、うなずく。
「街を少し出るだけで、こんなにも素敵な場所があるのね」

「ん？　リーシャ姉は知ってたんだろ？」
「ゆっくり立ち止まったことはないから……」
「あ、そうか……こんなところ、ふつうなら徒歩で来ないもんな」
「ロイドさんたちに感謝しないと……あ！　ごめんなさい、つい見入ってしまって」
「いや、そろそろ休憩しようと思ってたから、ちょうどいいよ。だいぶハイペースで来たからな」
　ティオは魔導杖を支えにして、なんとか、しゃがみこむのに耐えていた。
　エリィのほうも、汗をハンカチでぬぐっている。
　ランディは重たいスタンハルバードを担いで、まだ余裕がありそうだった。それとなく、周囲を警戒してくれている。
「バス、見かけなかったなあ？」
「トラブルから回復して、もうマインツに向かったのかもしれないな」
「ちょいと楽観的な気もするけど、意外とそんなとこかもな」
　ランディが肩をゆすって笑う。
　ティオが魔導杖を掲げた。
「見晴らしもいい場所ですし、付近をサーチしてみます」
「もう大丈夫なのか？」

「……わたしは、最初から問題ありません。子ども扱いされるのは心外です」
　シュリを意識しているのか、いつも以上にティオが意地を張っている。
　すこし心配になるロイドだったが、ここは信頼することにした。
「じゃあ、頼むよ」
「はい……」
　ティオがうなずくと、シュリが物珍しそうに尋ねてくる。
「なんだ？　なんかやるのか？」
「だ、だめよ、シュリちゃん……お仕事の邪魔をしたら」
　リーシャがたしなめた。
　とはいえ、なにをするかくらい教えてあげてもかまわないだろう。
「ティオは特別なセンサーを持っていて、その感度を高めることで、かなり遠くのことも把握できるんだ」
「マジかよ⁉　すげえじゃん！　ただのチビッコじゃなかったんだな！」
　シュリが瞳を輝かせて賞賛した。
　魔導杖を構えたまま、ティオが赤面する。
「こ、これくらい……どってことありません……」
　ちょっぴり得意そうな様子に、ロイドたちは苦笑してしまった。

おほん、とティオが、わざとらしく可愛い咳払いをする。
「……すこしだけ、静かにしていてください」
「おう、わかった！」
うなずくと、シュリは両手で口元を押さえた。
他のメンバーも固唾を呑んで見守る。
風の音と、鳥の鳴く声がした。
「アクセス。……感度、最大……付近をサーチします……」
ティオの髪飾りの三角部分が、赤く明滅しはじめる。
魔法陣が浮かび上がった。
穏やかな青白い輝きが、彼女を包んだ。
そして――
「ッ⁉」
「ティオ、なにかわかったのか？」
「この先で、魔獣が戦っている音がしました！　それと、金属音も……」
「なんだって⁉」
「距離は、20セルジュほどかと」
「それなら一息に走れるな……行こう、みんな！」

「はい」
「わかったわ！」
「おっしゃ、急ごうぜ！」
ロイドの呼びかけに、ティオ、エリィ、ランディが声をあげた。
リーシャとシュリもついてくる。
「シュリちゃん、魔獣がいたら、絶対に私から離れないで」
「わかってるって！」
ほどなく、ロイドたちの耳にも、戦いの音が聞こえてきた。

停留所の手前、吊り橋をくぐった直後の場所に、バスの姿があった。
あんなところで停まる予定はないはずだ。
白煙をあげている。
ガシャン！　ガシャン！　と金属音がしていた。
ロイドは目を見張る。
「魔獣だ！」

「でかいぞ！　よりによって、バスを攻撃してやがる！」
ランディがスタンハルバードを構えた。
バスのなかで乗客が助けを求めているのが、窓越しに見えた。
たちこめる白煙のせいで、その顔まではわからないが……
ティオが警告する。
「バスの導力機関が燃えているようです……車内に火が移る可能性もあり、あのまま乗っているのは危険かと！」
「バスを壊すなんて……街道の魔獣とは思えないわ……」
エリィが緊張した声をあげた。
ロイドは思考を巡らせる。
バスの乗客の安全が最優先だが、そのためには魔獣を遠ざけなくては。
「まず、魔獣を引き離す！　それから、バスの乗客を避難させるんだ！」
自分とランディが魔獣と戦い、ティオとエリィに乗客の誘導をしてもらおう――そう指示しようとしたとき、後ろからリーシャの声がした。
「ロイドさん！　私たちがバスに乗ってる人たちを避難させます！」
「えっ⁉」
「あの魔獣、手加減できる相手じゃありません！」

「わ、わかった……頼む、リーシャ！」
ロイドは仲間全員で、魔獣へと向かった。
リーシャが魔獣の強さを感じ取った理由はわからない。
しかし、バスを破壊してしまうほどの魔獣だ。かなり危険な相手なのは間違いなかった。
その魔獣は、紫色の頭を持ち、筋肉の塊のような身体を上半身だけ、地面の穴から出していた。
見えている上半身だけでも、ロイドより大きい。
全身を硬そうな体毛で覆っており、所々に棘のような長い毛が生えている。
なにより特徴的なのは、両手に備わった巨大な爪だった。
一本一本が剣のように鋭く太く長い。
その凶悪な爪で、バスの外装を破壊し、導力機関まで傷つけたようだ。
「さぁ、かかってこい！」
ロイドは注意を引きつけるべく、武器（トンファー）で殴りつける。
「歯応えありそうじゃねぇか‼」
同じように、ランディも打撃を加えた。
頑強だ。さほど効いた様子はない。
それでも、自分たちへ魔獣の意識を向けさせることはできた。

バスから遠ざける。
ティオが魔導杖を突き出し、《アナライザー》を使う。
センサーを集中させて敵の情報を収集する、彼女の得意技だった。
「なっ⁉　これは、グランドリューではありますが……危険度、大……手強いです」
以前、同じタイプの魔獣とは戦ったことがあるが、これほど強くはなかった。
人間にも強い弱いがあるように、個体差があるのだろう。
得られた情報をティオが数値化して教えてくれる。
ロイドたちに戦慄が走った。
「そんなに強いのか⁉」
「やばいぜ、ロイド……準備なしに戦える相手じゃない」
「くっ……」
「でも、まだ避難は終わってないわ！」
エリィの言うとおりだ。
リーシャとシュリが、バスの中に声をかけ、今、ようやくハッチが開けられたところだった。
白衣の青年と、看護師姿の女性が降りてくる。
「ロイド⁉　ロイドなの……⁉」

「セシル姉⁉」
バスに乗っていたのは、ロイドの姉のセシルと、研修医のリットンだった。
「ひ～‼　た、た、たすけて～‼」
「セシルさん！　今は、避難してください……‼」
「えっ⁉　リーシャさん⁉」
「理由(わけ)あって手伝っています！　さあ、急いで避難を！」
「そ、そうね！」
リーシャにうながされ、セシルがうなずく。
運転手も降りてきた。
「あ、ありがとうございます！　バスに乗ってたのは、これで全員です！」
「急いで逃げてください！」
「はい！　って……リーシャ・マオ⁉」
どうやら、誘導は彼女たちに任せておいても大丈夫そうだ。
ロイドは魔獣に意識を戻す。
グランドリューが、ぐんっと身体を反りかえらせる。
「グオオオオオォォォォォォォォ～～～～～～～～‼」
恐ろしい雄叫びをあげる。

リットンが、腰を抜かしてしまった。
「ひっ……ひぃぃぃ～～～!?」
「しっかりしてください、リットンさん！」
セシルに叱咤され、シュリに引っ張られて、彼は倒けつ転びつ逃げはじめる。
「さあ、運転手さんも早く！」
「は、はい！」
リーシャに言われて、バスの運転手も走りだした。
街道をクロスベル方向へ逃げていく。
あとは、この魔獣を退治できれば、大丈夫だ。
「みんな！　全力でいくぞ！」
「わかったわ！」
「おう、任せろ！」
「いきます……」
ティオが魔導杖の先端を、グランドリューに向けた。
「……ガンナーモード、起動します……オーバルドライバー、出力最大………………
エーテル、バスター!!」
青白い閃光がほとばしる。

まぶしくて、目を開けていられないほど。
轟音が鳴りひびいた。
ティオの切り札であり、ロイドたちが使えるなかで、最も威力のある攻撃だ。
ところが、ティオが息を呑む。
「……ッ!?　敵、反応あり！　しかも……そんな……」
ロイドは自分の目を疑ってしまう。
「なんだと!?」
巻きあがった土煙が晴れたとき、そこには、さらに三体のグランドリューが現れていた。
ランディが舌打ちする。
「チッ……そういうことか。さっきの雄叫びで、仲間を呼びやがったな!?」
「ど、どうするの、ロイド!?」
エリィが拳銃を構えつつ尋ねてきた。
──時間を稼いで、逃走するか？
いや、ロイドたちはともかく、一般人であるセシルたちが、何セルジュも魔獣から走って逃げるなんて、無理だ。
彼女たちが遠くに逃げるまで時間を稼ぐのは、退治するよりも難しいだろう。
「俺たちが逃げるわけにはいかない……ここで倒すしかないんだ……!!」

「そ、そうよね……」
「へへ！　とっとと終わらせようぜ！」
ランディが空元気で鼓舞する。
ティオがうなずいた。
「こんなところで……負けるわけには、いきません……」

リーシャは、バスに乗っていた人たちや、シュリを連れて街道を走っていた。
しかし、一般人の研修医や運転手は、早くもバテはじめている。
セシルだけは気丈に振る舞っているものの、彼女とて限界は近いだろう。
なにより、嫌な予感が消えていない。
（本当に危ないのは、こちらではなく……やっぱり、ロイドさんたち……）
「ちょっと休憩を入れましょう」
リーシャの声に、ぷはぁ～と男ふたりがへたりこんだ。
シュリが不満そうに嘆く。
「かぁ～！　だらしないな！」

研修医のリットンが、息も絶え絶えに返す。
「ぜえ、ぜえ……そ、そう言わないでくれよ……僕はデスクワークのほうが得意なんだ……はぁ、はぁ……」
「わ、私も……持病の腰痛が……ううぅ……すみませんね、お客さん……」
運転手のほうも、これ以上は走れそうになかった。
戦闘の音が聞こえないくらいには離れたし、特務支援課が魔獣を退治できれば、充分に安全だとは思うが……
おそらく、それこそが難しい。
（あの魔獣は、今のロイドさんたちでは……気配もひとつじゃなかったし……）
助けに行かなければ！
「あの、みなさん、ここで待っていてください。動けるようなら、できるだけクロスベルのほうへ」
シュリが目を丸くする。
「え？　リーシャ姉、どうする気だよ？」
「私は、ロイドさんたちの様子を見てくるわ」
「なっ⁉　なに言ってんだよ⁉」
「ごめんなさい、シュリちゃん……だけど、私、行かなくてはいけないから……」

「意味わかんないよ！」
　唐突に、セシルが駆け寄ってきた。
　リーシャは手を取られ、ぎゅっ、と両手で握られる。
「な、なんですか、セシルさん？」
「そう……そうなのね……リーシャさん……」
「えっ⁉」
「今まで、気づかなかったけれど、あなたは……」
　セシルが真剣な瞳で見つめてくる。
（ま、まさか……私が《銀(イン)》だとバレた⁉　ううん、いくらなんでも、そこまでは無理よね……でも戦える力を持ってることは気づかれたのかも？　そういえば、この人は、イリアさんの親友だったっけ……）
　セシルを紹介したとき、イリアは笑って言ったものだ。
〝有能かと思えば天然で、生真面目かと思えば意外と話せる。そして、いざというときには鋭くて、よく助けてもらったものだわ〟と。
　それは、日曜学校での話だったが、あのイリアが〝鋭い〟と評したのだ。
　ウルスラ病院でも、若くして看護師チーフを任されていると聞く。
「ううぅ……」

（よりにもよって、ロイドさんのお姉さんで、イリアさんの親友である、この人に見抜かれてしまうなんて……）
　しかし、まだ確信はないはず。
　誤魔化せるかもしれない。
「あ、あの、なにを感じられたか、わかりませんけど……私は、べつに……」
「いいのよ、隠さなくても。さっきの表情を見て、確信したわ」
「そんな⁉」
　リーシャは声から体格まで変えて、変装することができる。
　演劇をはじめてからは、さらに磨きがかかったと自負していた。
（毎朝、鏡の前で表情の練習までしてるのに！）
　セシルが微笑む。
「ぜんぶ、わかったわ、リーシャさん」
「くっ……どうやら、セシルさんには……き、気づかれてしまったようですね……」
　声が震えた。
　シュリが見つめている。
　研修医や運転手が聞いている。
　アルカンシェルでの日々を思い出して。

失われる光を想い。
涙がこぼれそうになる。
「わ、私は……ロ、ロイドさんが……」
――ロイドたち特務支援課が追っている、《黒月（ヘイユエ）》の協力者。東方人街の魔人。伝説の凶手。《銀（イン）》

「リーシャさん、ロイドとお付き合いしてるのね!?」

「…………は？」
セシルが乙女な瞳をキラキラさせていた。
「さっきの表情を見て、ピン！　ときたのよ。あれは、恋人を想う顔だって」
「い、いえ……あの……」
「ロイドもリーシャさんも、ひと言くらい教えてくれればいいのに。あっ、それとも、最近、お付き合いするようになったのかしら？」
「ちょっ……セシルさん……？」
「ああ、そうだわ！　リーシャさんは、アルカンシェルのスターだもの。男性とお付き合いだなんて、絶対に知られたらいけないのよね!?」

「まぁ、仮に、恋人ができたとしたら……劇団長に相談して公表するタイミングは選ぶと思いますけど……って、どうして、そういう話になってるんですか!?」
「いいのよ！　ぜんぶ、わかったから！　ごめんなさい、私が軽率だったわね。これからは、影ながら応援させてもらうわ！」
もう彼女のなかでは、リーシャはロイドと秘密の関係にあるらしかった。
イリアが聞いたら、脚本のネタとして喜びそうだが。
（ああ……そういえば……イリアさんから〝天然〟とも評されていましたね、セシルさん）
脱力してリーシャは肩を落とした。この疲労感は、マインツ山道を登ってきたよりも酷い。
シュリが顔を真っ赤にして、拳を握っていた。
「リーシャ姉！　そうだったのかよ！　オレにもナイショだったなんて！　あ、でも、イリアさんは知ってるんだろ!?」
「はぁ～……シュリちゃんまで……」
「あんなやつに、リーシャ姉はもったいないって思うけど！　でも、ほ、他のヤツよりはマシだし……オレ、反対しないから……」
「あ、うん……そっか……」
リーシャだって、ロイドのことは憎からず想っているが、恋人になったわけでもないの

に、応援されたり、認められたりしても——

とっても切ない。

すごく恥ずかしい。

わりとみじめ。

しかし、ここで誤解を解くよりも、利用したほうが話が早そうだ。

（そうよね。私は《銀(イン)》——利用できるものはすべて利用する……それだけのことよね。

うぅぅ～）

乙女心が痛すぎて、ちょっぴり涙が出てくるけれど。

リーシャはうなずいた。

「私、ロイドさんのところへ行かないと……わかってもらえますよね？」

「もちろんだわ！　恋人が応援してくれたら、きっと励みになると思うの。ロイドのこと、よろしくお願いね！」

「リーシャ姉……幸せになってくれよな」

「う、うん……行ってきます！」

顔を上気させているセシルとシュリと、ようやく息を整えた男たちに別れを告げて、リーシャは街道を戻る。

セシルたちの視界から隠れた。



次の瞬間――
黒衣の男が、大地を蹴った。



「だああああッ！　タイガァーーーチャーーージッ!!」
ロイドは必殺技を叩きこんだ。
「ギョアアァァァァ〜〜〜〜〜〜!!」
絶叫をあげて、巨体が崩れ落ちる。グランドリューを一体だけ、ようやく退治できた。
しかし、目の前には、まだ三体もの魔獣が爪を光らせていた。
多くの攻撃を受け止めたランディが膝をついている。
ティオは魔導力も体力も限界のようだ。
毒に犯されてエリィの顔色が青ざめている。
ロイドは渾身の大技で、なんとか一体を倒したものの、残る三体を相手にするだけの余力は、もう残っていなかった。
「くっ……こんなところで……」

負けられるものか！
武器を握る手に力を込める。
そのとき、上のほうから、聞き覚えのある声が降ってきた。
「――無様だな」
「なっ!?」
振り向く。
街道をまたぐ形で吊り橋がかかっている。その支柱の上に、人影があった。
黒衣をまとい、顔を仮面に隠している。
歪められた声と、強烈な威圧感。
「あんたは……銀(イン)!?」
「ぐっ、くっ……やばいぜ、ロイド……こんなときに……」
ランディがうめく。
エリィとティオも武器を構えるが、戦う力など残っていなかった。
黒衣の男が、鼻で笑う。
「フ……その程度の雑魚に苦戦とは……相変わらず、非力な連中だ」
「ううぅ……」
ロイドには言い返すことができなかった。

銀（イン）が殺意を放つ。
「……まとめて、始末してくれる‼」
「どれほど強大な相手でも……俺たちは絶対に諦めない！」
ロイドは歯を食いしばる。
――どうする⁉　今、大技を受けたら、俺もみんなも耐えられない！
銀（イン）が飛び上がった。
「我が舞は、夢幻（むげん）……去り逝く者への手向（たむ）け……眠れ、銀（しろがね）の光に抱（いだ）かれ……縛（ばく）ッ‼」
両手から幾本もの鎖が伸びる。
巨大なグランドリューたち三体の動きを封じた。
「ギョワ⁉」
「ギュルッ⁉」
「グルアァァッ⁉」
悲鳴をあげ、身じろぎするが、魔獣たちが自由を得ることはない。
黒衣の男がローブ下から、巨大で幅広な刀を取り出した。
影が走る。
大刀（だいとう）が頑強な皮を裂き、肉を断ち、骨を砕いていった。
銀（イン）が裂帛の気合いを放つ。

「ズゥァァァァァァァァァ……滅（めつ）ッ‼」
「「「ギュアァァァ～～～‼」」」
魔獣たちが絶叫した。
次々と倒れ伏す。
「な……に⁉」
ロイドは自らの身体を確かめる。グランドリューとの戦いで負った傷はあるが、それだけだった。
「俺たちを……攻撃しなかった……のか？」
「フ……運だけはいいようだな」
相変わらず高い場所から、黒衣の男が言った。
助けられた？
まさか！
ロイドは問いただす。
「どういうつもりだ⁉　それに、どうして《黒月（ヘイユエ）》に雇われているはずの銀（イン）が、マインツ山道なんかに⁉」
「む」
「しかも、徒歩で……？」

「そ、それは……」
「それは……⁉」
「……ハイキングだから」
「ん？　なんだって？」
　わずかに沈黙があった。
「今、お前たちに教える必要は、ない」
　銀（イン）が背を向けた。
「どこへ行くつもりだ⁉」
「フ……この場で、お前たちを始末するのは簡単だが……手負いを倒すほど退屈なことはない……私を捕らえたいのであれば、せいぜい強くなることだ」
「ま、待て！」
　ロイドの声も虚しく、黒衣の男は姿を消してしまう。
　魔獣は消え、銀（イン）もいなくなった。
「くっ……」
　気を張っていたロイドだが、戦いが終わった途端、痛みに膝をついてしまった。
「大丈夫か、ロイド⁉」
「あ、ああ……ランディこそ……」

「ヘッ、俺は気力を溜めてたのさ。ヤツが近づいてきたら、一撃かましてやるつもりだったんだがな。逃げられちまったか」
　軽口を叩く彼に、ロイドは笑いかけた。
　ティオがエリィの毒を除去する魔法（アーツ）を使う。
「ふぅ……どうですか、エリィさん？」
「ありがとう、ティオちゃん」
「それにしても、銀（イン）の目的はいったい……あれでは、まるで、わたしたちを助けに来たようなものですが……？」
「不思議ね。伝説の暗殺者とまでいわれた銀（イン）が、とくに用もないのに私たちを助けるとは考えにくいけど……」
「妙ですね……」
　エリィとティオがそろって首をかしげた。
　ロイドは立ちあがり、武器をしまう。
「よし……ひとまず、セシル姉たちと合流しよう」
　うん、と仲間たちがうなずいた。

ロイドたちはクロスベル方面へと急いだ。
戦いになる前に休んでいた、見晴らしのいい場所まで戻ると、そこにセシルたちが待っていた。
リーシャ、シュリと、研修医のリットンとバスの運転手もいる。
セシルが手を振る。
「ロイド～‼」
「セシル姉、無事だったんだね！」
急いで駆け寄った。
「ええ、ロイドとみなさんのおかげね……ありがとう」
「俺も他の人に助けられたんだけど……なんにしても、よかったよ」
ロイドは心から全員の無事を喜んだ。
ティオが、「エニグマで、クロスベルに連絡しておきました。しばらくすれば、救護車が来ると思います」と告げた。
エリィとランディがため息をつく。
リットンが天に向かって感謝の言葉をならべたてた。
「おお、女神（エイドス）さま、ありがとうございます！　助かった～」

運転手が怖々と訊いてくる。
「す、すみません……あの大型の魔獣は、どうなったんですかね？」
「一体は俺が仕留めましたけど……他の三体は、通りがかりの銀（イン）が倒してくれたんです」
リーシャがすごく驚いた顔をする。
「銀（イン）……って、あの銀（イン）が現れたんですか⁉」
「ああ」
「インってなんだ？」
そういえば、シュリは前の事件のときは、まだアルカンシェルに在籍していなかった。
「東方人街の魔人なんて呼ばれてる伝説の暗殺者らしいんだけどな」
「悪いヤツなのか⁉」
「クロスベルでは、まだ大きな事件を起こしてないけど……放ってはおけない相手であることは確かだよ」
「そんなヤツが、通りがかって助けてくれるなんて、変じゃね？」
シュリの疑問は当然だ。
ロイドたちも感じていた。
ぱたぱた、とリーシャが手を左右に振る。
「き、きっと、なにか事情があったんじゃないでしょうか？　本人に聞いてみないと、正

解なんてわかりませんし……深く考えても仕方がありませんよ」
「そうだな……」
ロイドがうなずくと、なぜかリーシャが吐息をついた。
セシルが、じっと見つめてくる。
「ロイド、リーシャさんとは、どういう関係なの？」
「え？　まさかセシル姉、また勘違いしてるんじゃ……俺とリーシャは無関係というか……知人……いや、友人くらいだと思うよ」
「あ、あはは……」
リーシャが複雑な笑みを浮かべた。
セシルは不服そうだ。
「さっき、リーシャさんはロイドたちの応援に行ったのではなかったの？」
「いえ、何度も説明しているとおり、戦いの様子を見に行ったんです……で、でも、怖くて近くまで行けなくて……」
「そうだったのか」
ロイドは冷や汗をかいた。あのグランドリューと戦っているとき、リーシャが来ていたら守る余裕はなかった。
シュリが明るい表情を見せる。

「ははっ！　まぁ、そんなこったろうと思ったぜ。おまえなんかに、リーシャ姉はもったいなさすぎるもんな！」
「俺だって、そんなに大それたことは、考えたこともないよ」
ロイドは苦笑する。
リーシャが首を左右に振った。
「そんな！　私なんて普通ですから、ロイドさんと不釣り合いなんてこと……あっ！　そ、そういう意味ではなく……!!」
「はは……ありがとう、リーシャ。そんなふうに言ってもらえるなんてうれしいよ」
「あ、う……」
リーシャは耳まで赤くなっていた。
ロイドはうなずく。
「たしかに、俺たちの間で上とか下とか言うのも変な話だな。これからもよろしく頼む」
「……はい」
どうやら恋人という仲ではないらしい、と納得してセシルは、ため息をついた。しかし、友人を得たことは喜んでくれているようだ。
シュリが、ロイドとリーシャの間に割り込んできて、ベタベタすんなよ～と邪魔をする。
エリィとティオが、いつもの調子でジト目になっていた。

「はぁ……あんなこと言って、自覚がないなんて……」
「……まぁ、天然ですから」
バスの運転手が、街道の先を指さす。
「救護車だ！　お～～い！」
「おお、お助け～‼」
ずっと女神様に感謝を述べていたリットンが、両手をぶんぶん振りたくる。
ランディが荷物を担いだ。
「おっし！　行くか」
「ああ、戻ろう、クロスベルに！」
ロイドの言葉に、みんながうなずいた。
（ふぅ……）
リーシャは安堵の吐息をついた。
みんなが救護車へと乗りこんでいくのを一番後ろで眺める。
ロイドたちの言動から、疑われている様子はなかった。
証拠など残していないはず。
そっとリーシャはつぶやくのだった。
「…………大丈夫。バレてない……よね？」

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント‼

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



3名様

『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ

大人気‼ オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！　※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで ▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.140プレゼント係
1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から１つずつ）
3：アンケート①『黎の軌跡Ⅱ』をプレイした第一印象は？
　アンケート②『黎の軌跡Ⅱ』をプレイして好きになったキャラクターは？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧
1：英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ -CRIMSON SiN- 最新情報
2：も～っと集まれ！ファルコム学園
3：英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～
4：ファルコムニュース
5：暁の軌跡最新情報
6：英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を

応募締め切り　10月27日（木）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.140

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/

Copyright	©Nihon Falcom Corporation.All rights reserved. ©2022 FIELD-Y ©DAISUKE ARAKUBO 2022 ©SHINKI KITSUTSUKI 2022 ©BOKUTENGO 2022

日本ファルコム(株)のライセンス許諾商品です。